令和２年度入学試験問題

小　論　文

（国際地域学科地域教育専攻）

注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまでは，この問題冊子を開かないこと。

2　**「問題」**は１ページが白紙です。２ページから６ページが問題本文と設問です。

3　解答用紙は２枚，下書き用紙は２枚あります。

4　解答は指定された解答用紙に記入すること。

5　受験番号は解答用紙の指定欄に記入すること。

6　解答は横書きとし，指定された字数にまとめること。

7　解答用紙のみを提出し，問題冊子・下書き用紙は試験終了後，持ち帰ること。**なお，いかなる理由があっても解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。**

8　試験中に問題紙の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は，手を挙げて監督者に知らせること。

問題　次の文章を読んで，後の**設問１**，**設問２**に答えなさい。

次のような場面を考えてみて下さい。あなたの友人２人が，ロビーの奥の席で熱心に話をしています。あなたが近づいていくと，ちょっと待ってくれと言って，２人はそのまま話を続けます。あなたは，最初，彼らが何の話をしているか全くわかりません。言葉としてはわかるのですが，何について話しているのかわからないので，ちんぷんかんぷんです。

それでも少しばかり聞いているうちに，あなたは彼らの言葉の端々から，ああ，あの話だな，ということに思い当たります。そうすると，とたんに彼らの話すすべてのことが了解可能になります。

そんな経験はありませんか。それを，心理学の実験にするとどんなものになるでしょうか。次の文章を読んでみて下さい。文章は，ブランスフォードたち（Bransford and Johnson，1972）のものですが，結構よくできています。

> 新聞の方が雑誌よりいい。街中より海岸の方が場所としていい。最初は歩くより走る方がいい。何度もトライしなくてはならないだろう。ちょっとしたコツがいるが，つかむのは易しい。小さな子どもでも楽しめる。一度成功すると面倒は少ない。鳥が近づきすぎることはめったにない。ただ，雨はすぐしみ込む。多すぎる人がこれをいっせいにやると面倒がおきうる。ひとつについてかなりのスペースがいる。面倒がなければ，のどかなものである。石はアンカーがわりに使える。ゆるんでものがとれたりすると，それで終わりである。

言葉としてはわかるのですが，ちんぷんかんぷんですね。文法や単語でわからないものはありません。でも，わかりません。「何の話」かがわからないからです。

ここで，この話は「凧（たこ）を作って揚げる」ことについてなのだ，と言われると，とたんにすべてが氷解しませんか。なぜ「最初は歩くより走る方がいい」のか見当もつきませんでしたが，「ああ，凧を揚げるときに走るあのことなのか」と合点がいきます。揚がるまでが大変ですが，いちど揚がってしまえば後は歩く必要すらありません。また，「ひとつについてかなりのスペースがいる」というのは，「他の凧と衝突したり糸が絡まったりしないように」なのだな，とこれも簡単に了解できます。

この簡単な実験をもとに考えていきましょう。

まず，**何の話かがわからなければ，話はわからない**，ということからです。これは，なぜでしょう。この問は逆にすると，わかりやすいかも知れません。何の話かわかると，私たちはなぜわかるようになるのでしょう。

この文章の場合，私たちに知らされたのは「凧を作って揚げる」ということだけです。「凧を作って揚げる」という言葉に含まれている情報だけで，文章がわかるようになったのでしょうか。そうではありません。凧に関する種々の知識があらかじめ私たちに存在しており，その知識が使われて，わか

ることができたのです。

そのことに疑問のある方は，凧に関する知識がない人に，「凧」に関する話だと示唆しただけで，この文章をわかるようになるかどうかを想像してみて下さい。風が弱いときには，走って揚げなければならないことを知らなければ，「最初は歩くより走る方がいい」ということがわかるわけはないでしょう。上空の方が風が強いせいでしょうか，凧は一度揚がるとあとは比較的楽です。このことを知らないで「一度成功すると面倒は少ない」ということがわかるでしょうか。

何の話かがわかると，私たちは，それまでちんぷんかんぷんだった文章が，わかるようになります。それは，凧に関する知識が文章を処理する際に使われるからです。（中略）凧に関する知識が，「凧を揚げる『最初』の段階」と「走る方がいい」という部分間に関連をつけるのです。「一度成功する（揚がる）と」という部分と，「面倒は少ない」という部分についても同様のことが行われています。

この文章の場合には，「凧に関する知識」ですが，一般的にこのように，あることがらに関する，私たちの中に既に存在しているひとまとまりの知識を，心理学，とくに認知心理学では「スキーマ」と呼びます。

すなわち，何の話か示唆されると，どの「スキーマ」を使えばよいかがわかるので，それを使って文章を処理していけるというわけです。したがって，「何の話かがわからなければ，話がわからない」のは，**どの「スキーマ」を使っていいかわからない**ためなのです。

「スキーマ」は，「私たちの中に既に存在しているひとまとまりの知識」であると述べました。ここで，「凧のスキーマ」は，私たちの中に既に存在しているはずなのに，なぜ，あの訳のわからない文章を読んだときにすぐに使えなかったのか，疑問に思う人がいるかも知れません。使えてもよいではないかというわけです。

それに対しては，そんなものなのだ，というしかないようなところがありますが，ちょっとだけ説明を試みてみましょう。

私たちの頭の中には，猛烈に大量の知識が存在しています。自然科学のこと，ファッションのこと，文学のこと，家庭電化製品のこと，動物のことなどなどです。

ある心理学者たちは，「〇〇を知っているか」と問われて，人はなぜかくも早く「知らない」と答えられるのだろうか，ということに疑問を抱き，一群の面白い研究をしています。頭の中を片っ端からスキャンして，その結果，そのような知識が存在しなかったという意味で，「知らない」と答えるのであれば，一つの問に「知らない」と答えられるまでに，何週間もかかるだろうと考えたからです。

そのくらい私たちの所持している知識は膨大なものです。したがって，それらを一時に全部使うことなど到底できません。一時に意識することなど不可能です。そのため，ある一部のひとまとまりの知識を持ちだしてきては使う，というのが，私たちのやり方なのです。その場に応じてある部分の知識を持ちだしてくること，または，全体の知識の一部分にスポットライトを当てて使えるようにすることを，「活性化」と呼びます。記憶の，ある領域を事前に活性化しておくと，その部分の反応が早くなるという，「プライミング」などと呼ばれる実験の分野が心理学にあったりもします。

「何の話」かといった話の内容に関する指示や示唆は，ある「スキーマ」を「活性化」させます。凧の話だと知らされることで，凧の「スキーマ」が「活性化」され，その結果，読み手を文章の処理に向かわせることになるのです。

「何の話かわからないと，文章がわからない」といったように，ここまで「何の話」という言葉を使ってきましたが，これを認知心理学では，「文脈」と呼びます。

文脈を一般的な辞書で引くと，「文中での語の意味の続きぐあい。文章の中での文と文との続きぐあい。比喩的に，筋道・背景などの意にも使う」（『広辞苑』第５版）とあります。「文脈」には「文」の字が入っていますが，文や文章の領域を超えて，比喩的にもう少し広い意味で使われているわけです。

また，辞書の説明には，「文脈」は「文と文との続きぐあい」であるといったように，「もの」と「もの」との「続きぐあい」であるとあります。ただ，「続きぐあい」を考えていくには，それらの「もの」が「続く」ための，「背景・状況」が必要です。

そこで，こう言い換えた方がいいかも知れません。「もの」と「もの」とが，続くことが可能なのは，前の「もの」と後ろの「もの」とが，同じ「背景・状況」を共有しているからに他なりません。ですから，認知心理学のように，文脈とは「物事・情報などが埋め込まれている背景・状況」なのだと考えた方がよいだろうと思います。その「背景・状況」によって「続きぐあい」が生じると考えた方が，より一般性を持つと思うからです。

A

もうひとつ，「文脈」のわからない文章を読んでいただきましょうか。この文章も，ブランスフォードたちの実験材料です（Bransford and Johnson，1972）。この実験は，この分野では，古典になった感のある有名なものです。

> 風船が破裂すれば，なにしろすべてがあまりに遠いから，音は目当ての階に届かないだろう。ほとんどの建物はよく遮蔽されているので，窓がしまっているとやはり届かないだろう。作戦全体は電流が安定して流れるかどうかによるので，電線が切れると問題が起きるだろう。もちろん，男は叫ぶこともできるが，人間の声はそんなに遠くまで届くほど大きくはない。付加的な問題は，楽器の弦が切れるかも知れないことである。そうすると，メッセージに伴奏がつかないことになる。距離が近ければよいのは明らかである。そうすれば，問題の起きる可能性は少ない。顔を合わせている状態だと問題が少なくてすむだろう。

毎度ですが，一読して「よくわからない」という感じを持たれたと思います。そして，それは「単語や文法にわからないものがあるからではない」ことを，ここでも確認しておいて下さい。

ブランスフォードたちがこの実験を行った趣旨は，「文脈」の必要性のデモンストレーションです。

あるグループには，文章中にでてくる事物の諸関係がわかる絵（図１）を，まず30秒間見せています。その後，文章を聞かせました。このグループの逐語（ちくご）再生と理解の評定はよい成績を示します。

それに対して，別のあるグループは，今の私たちのように，絵を見せられないまま文章を聞かされます。このグループの成績は著しく悪いものになっています。

絵（文脈）を事前に与えると，よくわかる。絵を与えられないと，わからない。文脈は必須だ，というのがブランスフォードたちの実験の趣旨です。

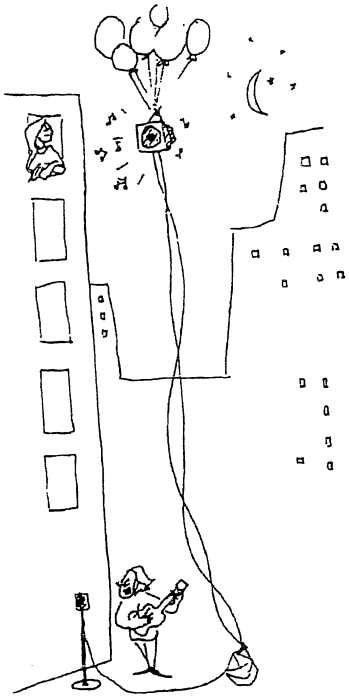

図１（Bransford and Johnson，1972）

（西林克彦「わかったつもり－読解力がつかない本当の原因」光文社新書（2005）より抜粋，一部改変。）

設問１　スキーマ，活性化，文脈の３つの語をそれぞれ説明しなさい。［　A　］は，ここまでの文章のまとめとして，３つの語の関係性が書かれています。３つの語の説明と，［　A　］に入るまとめを200字以上250字以内で書きなさい。　(150点)

設問２　今，学級には様々なタイプの子どもが在籍しており，それぞれの子どもが持っているスキーマも異なります。そこで，たくさんの子どもたちが「わかる」授業をするために必要な教師の配慮について，スキーマという語を用い，あなたの経験を踏まえて600字以上700字以内で論じなさい。　(250点)